

もくじ
 漫画家にして水彩画家、丹野雄司 1P・2P
 行政文書に見る水害記録 (一) 3P
 はい、文化財係です。8 (本田家文書) 4P



図2 丹野雄司筆《西新井大師 山門》
 平成19年 水彩・紙 当館蔵



図1 原作：御荘金吾 作画：丹野ゆうじ
 『アイヌ・ウエペケレ』第1話原稿
 『少女クラブ』昭和33年7月号掲載 当館蔵

足立史談

第612号

2019年2月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(30-309)

戦後足立の芸術家 漫画家にして水彩画家、丹野雄司 小林 優

二〇一九年も二月を迎え、いよいよ「平成」から新元号への転換が間に迫ってきました。「平成」も過去になりつつある中、「昭和」はさらに遠いものとなりつつあります。近年の文化遺産調査では、この昭和初中期における区内の美術・文芸分野における展開や、その担い手にも目を向け、調査を行ってきました。そしてその中で、平成三十年(二〇一八)、ご遺族からの関連作品・資料の調査および寄贈の申し出を頂き、その活動への調査がはじまったのが、昭和のはじめに西新井に生まれ、戦後から平成にかけて同地を拠点に漫画家、水彩画家、そして工業デザイナーと、多彩な方面での活躍を展開した丹野雄司(たんのゆうじ、一九二九～二〇一六)氏でした。

戦後足立における芸術家の一人として、今回はこの丹野雄司氏の足跡をご紹介します。
 ■教員から漫画家へ 丹野雄司氏は昭和四年(一九二九)、日清紡績に勤

務する父のもと同社の社宅のある西新井に生まれ、戦中戦後の動乱期を同地で過ごしつつ、東京府立航空工業学校、東京物理学校(二部、現東京理科大学)へと進学して機械工学を学びました。卒業後は一時、教員として梅島第一小学校へと勤務することとなりますが、絵画の道への志向はこの前後よりあったものと見られ、物理学校在学中に描かれた油彩画が現存する他、教員として勤務中の昭和二十六年(一九五二)には、教育者の発表機関として結成された美術団体「大潮会(だいちようかい)」へと作品を出展し、入選するに至っています。

画家の萌芽を見せつつ、教員の道を歩みはじめた丹野氏ですが、数年で教職を辞し、続いて少女漫画家としての道へと進むこととなります。
 ■少女漫画家として 丹野氏のご遺族によれば、昭和二十年代、西新井の近在地域に絵画を嗜好する青年たちが集まるグループがあったと言います。このグループには出版社に通じた人物もおり、画才ある人たちに漫画を描くことを勧め、実際に雑誌へ漫画作品を掲載することとなった人物も複数いたと言います。丹野氏もまた、この集いに入ります。丹野氏漫画家への道が開かれた一人でした。丹野氏自筆の経歴書によれば、昭和二十年の執筆を開始したのは、昭和二十

七年(一九五二)のことで、作品掲載の主な舞台としたのは『なかよし』、『りぼん』、『少女クラブ』、といった年少の女子を対象とする雑誌でした。特に『少女クラブ』への掲載は多く、丹野氏の主な作品掲載の場であったことが窺えます。

『少女クラブ』(創刊時は『少女倶楽部』)は、大正十二年(一九二二)、大日本雄弁会講談社(現・講談社)から発刊された少女雑誌です。少女向けの小説・詩の掲載を中心として掲載陣容を整えましたが、次第に画中心の漫画の掲載を増やし、少女漫画雑誌へと進展していきました。昭和二十〜三十年代には手塚治虫の『リボンの騎士』、『火の鳥』や、長谷川町子の『サザエさん』などが連載を行います。この『少女クラブ』に丹野氏が初めて掲載したのは、昭和三十三年(一九五八)七月号の、放



図3 丹野ゆうじ 筆
『よし子ちゃん物語』原稿
『少女クラブ』昭和34年9月号掲載

■工業デザイナーから水彩画へ
漫画執筆を断念した丹野氏は翌三十八年、工業製品の設計やデザインを請け負う「プラス工房」を設立し、足立区内外のメーカーからの受注を

送作家・劇作家の御荘金吾(みしよ うきんご)、一九〇八(八五)の原作に丹野氏が作画を行った、アイヌの黄金をめぐる時代冒険活劇『アイヌ・ウエベケレ』(図1、ウエベケレⅡ)「昔ばなし」の意)の連載でした。同時期には石ノ森章太郎やちばてつやが漫画を連載し、彼らと共に連載を続けた丹野氏は、これ以降も「よし子ちゃん」という少女を主人公とする一話完結の連載話『よし子ちゃん物語』(図3)をはじめとする多くの物語を掲載していきました。

少女漫画家として懸命な作画を行っていた丹野氏でしたが、作画活動およそ十年を経た昭和三十七年(一九六二)、持病の喘息の悪化により漫画家としての執筆を断念することとなります。そしてこれに続き、丹野氏が進んだのが、かつて学んだ機械工学の知識を活かした工業デザイナーの道でした。

受けてカセットレコーダーなどの工業器械や、プラモデルなどの設計・デザイン(図4)を請け負うようになっていきます。世の工業生産が活発化していく中、丹野氏も多くの製品デザインを手掛け、また昭和四十年頃からはデザインと合わせて自身でも西新井の自宅を店舗として模型店「ピットイン」を開業し、地域の子供たちにプラモデルなどの販売を行うようになりませんが、その中で冷めやらなかったのが、絵画への志向でした。

昭和五十五年(一九八〇)、模型店や工業デザイナー業を行いつつ絵画の制作も続けていた丹野氏は、同じく足立区内を拠点に活動を行っていた、美術団体「太平洋美術会」の重鎮、椿悦至(つばきえつし、一九一四〜二〇〇三)に師事し、改めて自身の画業を始動していきます。

丹野氏は、師の所属する太平洋美術会を主な発表・研鑽の場とし、港湾に浮かぶ船舶を主体的なモチーフとしつつ、自身が暮らす足立区や西新井大師(図2)、そして近在の埼玉県見沼田んぼや菅生沼などへと足しげく通い、その光景を水彩画として写し取りました。そして、そのような制作を続ける中で椿氏に師事し始めた昭和五十五年(一九八〇)も太平洋美術会で初入選を飾ってからは、同会への出展を続けて入選・受賞を

重ね、平成八年(一九九六)には同会展へ出展した、やはり船舶を題とする『廢』(現在当館蔵)が文部大臣奨励賞を受賞するに至ります。そしてその後は、同会の主宰する太平洋美術会研究所の講師も務めつつ、後進の育成にも尽力しました。

■おわりに 教員から漫画家へ、そして工業デザイナーから水彩画家へ、多様な経歴を歩んだ丹野氏ですが、平成二十八年、その後の活躍を嘱望されつつこの世を去ることとなります。しかしその活動は漫画、工業、水彩といった様々な動向において稀有な痕跡を残すものとなりました。「昭和」が遠くなりつつある今日、我々は改めてその時代を歩んだ人々の足跡を顧みる必要があります。丹野雄司氏の足跡を伝える諸資料は、その好資料として、今後見ていくべきものとなるでしょう。

(当館学芸員)

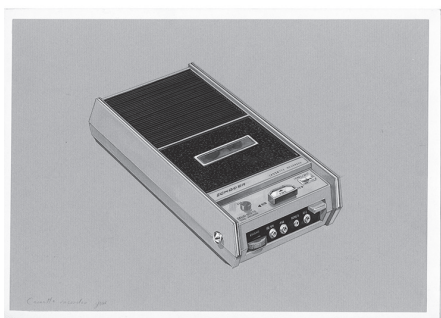


図4 丹野雄司 筆
「カセットレコーダー デザイン図案」
当館蔵

行政文書に見る

足立区の水書記録(一)

山崎 尚之

■重要文化財に指定された南足立郡役所の書類 現在、世田谷区玉川にある東京都公文書館(二〇一九年度中に国分寺市に移転予定)の所蔵する「東京府・東京市行政文書」(三三八〇七点)は、平成二十六年に

国の重要文化財に指定されています。指定にあたっての文化審議会答申に付属する「解説」には、「慶応四年(一八六八年)開設の東京府及び明治二十二年(一八八九年)開設の東京市及び関係機関にて授受、作成、保管されてきた近代行政文書群で、昭和十八年(一九四三年)の東京都設置以前の文書を対象とする一括資料。(中略)個々の文書事案からは東京府及び東京市の基本政策や行政機構のみならず、東京の都市形成過程が理解される。我が国の首都の歴史的展開を知る上で重要な基本資料である。」とあります。

このように重要文化財指定された「東京府・東京市行政文書」の中に、まさに東京府の関係機関である南足立郡役所で作成された行政文書があります。それは表紙に『明治四十年起 出水書類 南足立郡役所』と墨書された二百三十二枚四百六十四頁ほどの簿冊(行政文書)です。あま

り知られていない、この書類を読むことで明治期に起こった水害の様子を述べてみたいと思います。

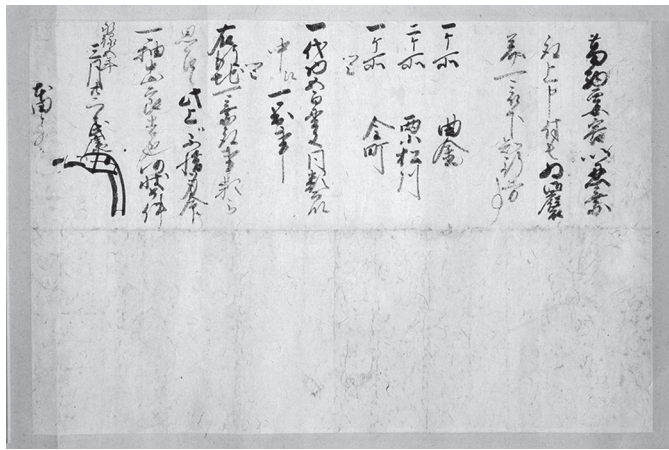
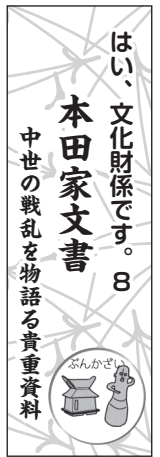
■数少ない南足立郡役所の簿冊(行政文書) 東京都公文書館の所蔵する行政文書の中でも南足立郡役所の簿冊は五冊だけで、その中でも明治期のものはこれと兵事関係書類の二冊だけです。そのため南足立郡の書類が東京都公文書館に所蔵されていることはあまり知られていないと思われます。もちろん、南足立郡役所関係の文書は、東京都公文書館の情報検索システムで検索すればこれらの他にも届けや願い、伺い等の件名レベルまで調べることができ、多くの簿冊の中に南足立郡関係の文書を見つけられますが、一冊すべてが南足立郡関係の簿冊となっているものは明治期ではこれら二冊のみしかなく、さらに定例業務の結果としての簿冊が多い中、或る年の水害のみを記録した珍しい記録は他にありません。

しかし、この簿冊を見ていくと、その中に「鶴川村各大字区会議員」と東京府の用紙に書かれた名簿が五頁あります。この「鶴川村」というのは「東京府南多摩郡鶴川村」(現在の東京都町田市鶴川)という場所で、南足立郡とは関係がありません。なぜ鶴川村の名簿が簿冊の中ほどに挟まれているのでしょうか。それはこの『出水書類』を構成する各書類が、

もともと南足立郡役所にあった時も東京府の関係部署に何らかの理由で後に所蔵された時もバラバラの状態が存在していて、最終的に所蔵することになった東京府の関係部署の人が一冊に綴った時に誤って鶴川村の書類も中に入れてしまい、『明治四十年起 出水書類 南足立郡役所』と題名と作成部署のみを墨書した表紙を付けたのだらうと思われ(定例的文書なら分類や種別が表紙に記載されたと思われます。この文書の表紙にはそれらが無いことから、残ってしまったイレギュラー文書なのではないかと思えます)。恐らくこのような過程を経て、この書類は簿冊としてできあがり東京府に残ったのだらうと思えます。そのおかげで、当時はおびただしく作成されたにも関わらず、現在では、あまり残されていない南足立郡役所の原議や当時の南足立郡内の町村(千住町や江北村、綾瀬村など十町村)の書類も見ることもできます。なぜ、南足立郡の明治時代の大水害の記録が、東京府に譲渡されて保管されたのか、経緯は不明ですが、東京府から東京都に組織が変更されても保管され続けたことにより、私たちは水害の様子をより詳しく知ることができそうです。

■記録として残った二度の水害 この簿冊の中には、二度の水害の様子が記録されています。一つ目は、明治四十年(一九〇七年)の水害、もう一つは明治四十三年(一九一〇年)の水害です。両方とも、台風の通過による大雨がもたらしたのですが、明治四十三年の水害が、大災害として多くの書物に記録され、石碑に刻まれ、後々まで人々に記憶されたのに対して、明治四〇年の水害は記録・記憶とも多くはありません。しかし、今回、この簿冊の記録を読んでみると、明治四〇年の水害も大きなもので、対応に苦慮している様子が見られます。簿冊の枚数(頁数)としても、四〇年の水害が約百五十枚(三百頁)なのに対して四十三年の水害は約八〇枚(百六十頁)ほどです。作成された書類の量と残されたそれが比例しているとは思えませんが、四十三年の水害の倍近くの書類が残されたということは、相当に大きな水害だったと言えるのではないかと思います。後世の記録としては、明治四十三年の水害の被害の印象が圧倒的であったためか、大量に記録が残され、また、人々の記憶の中にも「四十三年の水害は大災害」として残ったのではないのでしょうか。そのために、明治四〇年の水害の記憶は、人々から消えてしまった、もしくは、四十三年の水害の記憶の中に埋もれてしまったのかもしれませんが。

今回は、具体的に『出水書類』を見たいと思います。(当館専門員)



永禄5年3月22日北条氏康判物 本田家文書

足立区立郷土博物館では、三月一九日(火)から五月六日(月・祝)にかけて、「戦国足立の三国志―宮城氏・舎人氏・武蔵千葉氏―」と題した展示を開催いたします。今回は、その展示に関係した文化財として、本田家文書をご紹介します。

■戦国時代の足立区 戦国時代の足立区は、岩付城(埼玉県さいたま市岩槻区※戦国時代は岩付と書かれています)を拠点とする国衆(戦国大名に従属しつつ、独立性の強い領

主)の岩付太田氏の家臣宮城氏・舎人氏、小田原城(神奈川県小田原市)を拠点とする戦国大名の北条氏に従属していた武蔵千葉氏の三氏が存在しました。

■岩付太田氏と北条氏の対立 岩付太田氏は、武蔵国を拠点としていた扇谷(おうぎがやつ)上杉氏の家宰として名高い太田道灌(一四三二〜一四八六)の流れをくむ名門ですが、十六世紀初頭には独立した存在となっていました。

この頃、関東には新興勢力として、北条氏が台頭してきます。北条氏は、武蔵国への攻勢を強め、天文十五年(一五四六)には、河越合戦で扇谷

上杉氏とその同族で関東管領の山内(やまのうち)上杉氏と戦い、扇谷上杉氏を滅亡させ、山内上杉氏を衰退させることに成功します。この結果、岩付太田氏も北条氏に従属することになりました。

敗れた山内上杉氏は、越後国の長尾景虎(後の上杉謙信)を頼り、北条氏を攻めるように要請します。これを受け、長尾景虎は、永禄三年(一五六〇)に関東に向けて出兵します。これにより、反北条勢力は力を得て、岩付太田氏も北条氏から離反します。

■葛西城をめぐる攻防 足立区のご隣の下総国葛西城(葛飾区青砥)は、天文七年(一五三八)に北条氏綱が攻略しました。ところが、長尾景虎が関東に攻め寄せてくると、景虎に味方した房総半島の戦国大名里見氏の手落ちします。

長尾景虎は関東で越年し、そのまま小田原城を包囲しましたが、落とすことができず、越後国へ帰国してしまいます。すると北条氏は反撃を始め、葛西城攻略に乗り出します。

■葛西城の攻防と本田氏 葛西城攻防をめぐる第一級の史料が足立区立郷土博物館に寄託されている本田家文書です。本田氏は、三郷市茂田井や葛飾区金町に居館を有したと伝わる領主です。

本田家文書には、戦国時代の古文

書が九点残されており、そのうち八点が葛西城攻防戦に関するものです。これらの文書の中には、北条氏康が本田氏に対して、葛西城を「忍(しのび)」をもって乗っ取るように命じたものがあります(写真)。「忍」を忍者と考えるか、目立たないようにとという意味で考えるかで議論がありますが、本田氏が葛西城の攻略において重要な役割を果たしていたことは間違いありません。葛西城は、永禄五年四月二十四日に本田氏の活躍によって落城しました。

■第二次国府台合戦と足立 葛西城落城から二年後、葛西城からすぐそばの国府台(千葉県市川市・松戸市)で北条氏対里見・岩付太田連合軍の合戦が起こり、岩付太田氏に属した舎人孫四郎が華々しく活躍します。しかし、舎人氏は北条氏に敗れたため没落してしまいます。一方、宮城氏は、北条氏に従属する道を選び、家を存続させます。しかし、北条氏は天正十八年(一五九〇)に豊臣秀吉によって滅ぼされ、宮城氏・武蔵千葉氏も運命を共にしました。

展示では本田家文書をはじめ、より詳細に足立区の戦国時代についてご紹介いたします。ぜひ、展示をご覧にお越しください。

(文化財係 学芸員 佐藤貴浩)

読み下し

葛西要害を忍びをもつて乗っ取り
上げ申すについては、御褒美として
下さるべき知行方の事、
一ヶ所 曲金(葛飾区高砂)
二ヶ所 両小松川(江戸川区)
一ヶ所 金町(葛飾区)
以上
一代物五百貫文同類衆中え出すべき
事、以上
右、かの地乗っ取るべき事、頼みお
ぼしめされ候、この上は身命を惜し
まず忠節をぬきんずべきものなり、
よつて扶くだんのごとし、
永禄五年
三月廿二日 氏康(花押)
本田とのへ